

同一化し続ける〈自我〉

—『全体性と無限』における絶対的〈同〉について—

Le Moi toujours faisant l'identification - Sur l'absolument Même dans *Totalité et infini* d'Emmanuel Levinas

田 中 菜 摘* TANAKA, Natsumi

はじめに

エマニュエル・レヴィナス (1906-1995) の思想は、大きく3つの時期に分けられて研究されてきた。本稿で主題的に扱う第一主著『全体性と無限 —外部性についての試論—』は、彼の中期思想に位置付けられる。確かに、他者との倫理的関係が強調される『全体性と無限』では、前期思想で論じられた「存在l'être」、あるいは「イリヤ il y a」との関係は後景に退き、後期思想で展開される「痕跡 trace」や「隔時性 diachronie」の議論とは一線を画していると言える。しかし、この区分はレヴィナスが他者をどのように論じたかという点から成されている。これに対し、レヴィナスは〈自我〉の関係性を軸に据えた独自の主体概念を構築しようとしているという主張のもとにおいては、彼の思想は一貫したものとして読むことができる。主体についての彼の思想は、変遷はするが断絶はないからだ。この一貫性を示すためには、他者についての考察が主題的に論じられる『全体性と無限』における〈自我〉および〈同〉le Mêmeがどのような主体性を意味するのかということ明らかにする必要がある。そこで、本稿では、「絶対的〈同〉」の考察を通して、社会（他者との倫理的関係、形而上学的関係）に対しても、自然（原始的なものとの関係、「わが家」の考察）に対してもその同一化が成就することのない〈自我〉を、同一化し続ける〈自我〉として、その無益な「働き」において明らかにする。

後に見るが、レヴィナスは『全体性と無限』において、「絶対的〈同〉」を〈自我〉と言い換えている。この箇所では、確かに「絶対的〈他〉」の対立項として「絶対的〈同〉」が論じられているのだが、果たしてこの〈同〉の絶対性は「絶対的〈他〉」との対立を通して画定されるのだろうか。「絶対的〈同〉」と「絶対的〈他〉」は項と項との対立関係にあるのだろうか。この問いが本稿の出発点となる。

* 岡山大学社会文化科学研究科博士後期課程

¹ 『実存から実存者へ』(1947)を中心とした初期思想、第一主著『全体性と無限 —外部性についての試論—』(1961)を中心とした中期思想、第2主著『存在するとは別の仕方 —あるいは存在の彼方へ—』(1974)を中心とした後期思想である。

² *Totalité et infini* _Essai sur l'extériorité (1961) 以下『全体性と無限』と略記する。

この問いに答えるために、まずは「分離」という〈同〉と〈他〉の「関係なき関係 rapport sans rapport」(TI, 79, 329)を考察する。そして、「分離」というレヴィナス独自の関係概念を、項の存在を関係の成立条件とする一般的な関係ではなく、項に依拠せず成立する関係として論じ、これを「関係の先行性」として明らかにする(Ⅰ)。その上で、この「関係なき関係」によって浮かび上がる項としての「絶対的〈同〉」を、主体の実存様態(「わが家 chez soi」)の「両義性」によって考察する(Ⅱ)。以上のことから、「絶対的〈同〉」を、成就しない同一化を行い続けることでその同一性を保ち続ける〈自我〉、すなわち「同一化」し続けることしかできない〈自我〉として論じる(Ⅲ)。「自我は卓越した同一性 l'identité par excellence であり、同一化 identification という本源的な働き œuvre なのである」。(TI, 25) この自我の「卓越した同一性」は、近代的自我が有する「普遍的な同一性」(TI, 25)ではなく、「同一化という本源的な働き」でしかない。この動的な「同一性」こそが「絶対的〈同〉」の本質なのである。

以上のような「絶対的〈同〉」の考察から、〈自我〉の「卓越した同一性」(TI, 25)を「働き」という運動として示すことにより、〈同〉と〈他〉を「関係なき関係」として論じる中期思想と、「隔時性」として論じる後期思想との架橋を試みる。

Ⅰ. 関係の先行性

『全体性と無限』は、確かに「絶対的〈他〉 l'absolument Autre」、「絶対的外部性 l'extériorité absolue」について論じられている。ただし、これらは単独で思考されたのではなく、常に「分離」、「関係なき関係」において思考されていることを注視しなければならない。さらに、この「関係なき関係」は、一般的に考えられているような関係ではない。

一般的な関係には常にそれに先立つ諸項の成立が前提されており、関係の分析は諸項の分析と切り離せない。すなわち、項が想定されないなら関係は生じ得ず、関係があるなら必ず項は想定される。従って、どのような関係を論じるためには、諸項がそれぞれどのようなものであるか考察せざるを得ない。関係は諸項間の繋がりに依拠し、関係の内実は諸項間の繋がり方に左右される。この諸項間の繋がりを、レヴィナスは「中間的で中立的な項」と述べて、次のような存在論批判の一端にしているのではないか。「西洋哲学はおおむね存在論であった。存在了解を保証する中間的で中立的な項を媒介することによって、〈他〉を〈同〉に還元してきたのである」(TI, 33-34)。「関係なき関係」を翻した、この言わば「関係のある関係」は、諸項が何かによって繋げられ得る関係と言える。項の存在を関係の成立条件とし、「存在了解を保証する中間的で中立的な項」の媒介によって繋げられる「関係のある関係」を、本稿では「存在論的關係」と呼ぶことにする。

こうした「存在論的關係」は、諸項の対称性や同時性を前提せざるを得ない。しかし、この諸項の対称性や同時性ゆえに、〈他〉を〈同〉に還元する「〈同〉の帝国主義」(TI, 29)を可能にしてしまう恐れがある。これを乗り越えるためにレヴィナスは、一般的関係とも換言できる「存在論的

関係」を否定してもなお残る関係として「関係なき関係」を、「〈同〉と〈他〉の関係—あるいは形而上学的関係」(TI, 29)を論じたのではないだろうか。「〈他〉は〈同〉と関係しているにも関わらず〈同〉に対して超越的であり続ける」(TI, 28-29)と言われる「形而上学的関係」は、従って「〈他〉を〈同〉に還元」する「存在論的關係」とは明らかに異なる。それならば、「形而上学的関係」とは、諸項の対称性や同時性が想定されない、つまり諸項が先行して想定されない関係と言えるのではないだろうか。さらに、「絶対的〈同〉」とは、「絶対的〈他〉」との関係を構築するために必要な項ではなく、「絶対的〈同〉」にも「絶対的〈他〉」にも先立つ〈関係〉から浮上する項なのではないか。これらの問いを考察するために、本章では、まず「絶対的〈同〉」の記述を確認(I-1)し、「分離」という「関係なき関係」の考察を通して、項に先立つ関係の先行性を「形而上学」によって説明(I-2)する。

I-1. 絶対的〈同〉 — 関係への未参入性

まずは、『全体性と無限』において「絶対的〈同〉」がどのように扱われているのか確認しよう。同書においては、「絶対的〈他〉」、「絶対的外部性」というように「絶対的」という語が〈他〉や「外部性」に結び付けられる箇所は枚挙にいとまがない。これに対し、この「絶対的」という語が〈同〉について明確に使用された箇所はわずかしかない。「〈同〉と〈他〉を分離する絶対的な隔たりが埋められてしまう」(TI, 25) ことがない「〈同〉と〈他〉の間の根底的な分離」(TI, 24)を論じた直後で、レヴィナスは次のように続ける。

他性、〈他〉の根源的異質性が可能となるのは、出発点に留まり続けること、関係の入り口に仕えること、相対的ではなく絶対的〈同〉 *le Même non pas relativement, mais absolument* であることを本質とする項との関係によって〈他〉が異なっている場合のみ *si l'Autre est autre* である。ある項が関係の出発点として絶対的に留まり得るのは、〈自我〉 *Moi* としてのみなのである。(TI, 25)

「絶対的〈同〉」が明示されたこの引用箇所は、どう読まれるべきだろうか。この問いは、「出発点に留まり続けること、関係の入り口に仕えること」、あるいは「ある項が関係の出発点として絶対的に留まり得る」ということの解釈をめぐる問題提起である。

「〈同〉と〈他〉を分離する絶対的な隔たり」の論述から続いていることから、引用箇所にある「他性、〈他〉の根源的異質性」は、「絶対的〈他〉」であると考えられる。従って、この引用箇所は「絶対的〈他〉」を炙り出すために、レヴィナスが〈他〉を含まない「絶対的〈同〉」を要請している箇

³ 原文中の《》、()とも原文同様に表記し、イタリックの箇所は傍点によってあらわした。

所として読まれる場合がある。例えば藤岡も小手川も同じ箇所を引用しつつ、「融即」を脱した「分離」によって〈他〉との関係からは独立して画定された自我としての「絶対的〈同〉」から出発することで、「絶対的〈他〉」が描出されると論じる。確かに、「他性、〈他〉の根源的異質性」があらわれるためには、それに先立つ自我、すなわち〈同〉と〈他〉の区別が非類似的に明確化されていなければならないだろう。とはいえ、この「〈他〉の根源的異質性」が、〈同〉と〈他〉という各項の分析に依拠するなら、「〈同〉と〈他〉の間の根底的な分離」(TI, 24)は「分離」ではなくなってしまうのではないだろうか。従って、「他性、〈他〉の根源的異質性」を可能にする「〈他〉が異なっている *l'Autre est autre*」という引用箇所の「異なる *autre*」も、〈同〉とは「異なる *autre*」という相関的事態よりもなお根源的な「*autre*」を意味していなければならない。「絶対的〈他〉」を記述するために、この引用箇所の「絶対的〈同〉」を論じる観点は、どれほど「〈他〉の根源的異質性」を強調しようとも、この「*autre*」を「存在論的關係」に留め、両項の絶対性を逆に損ねてしまうのではないだろうか。

というのも、項の絶対性から関係の絶対性、つまりは「絶対的〈同〉」から「〈同〉と〈他〉を分離する絶対的な隔たり」を割り出し、そこから「絶対的〈他〉」を論じるという手順には限界がある。関係が認められる諸項は、すでにして関係性の中にある。よって、諸項との関係の中にある項からしか関係は見出せない。逆に言えば、関係から独立している項から関係を見つけることはできないのではないだろうか。だからこそ、関係の先行性を考察するためには、項によって関係が成り立つという「存在論的關係」が退けられなければならない。こうした項に先立つ関係の先行性という点を強調して「絶対的〈同〉」の考察をすすめよう。

項に先立って論じられる〈関係〉においては、「絶対的な隔たり」の方が「絶対的」な両項を要請することになる。従って、「絶対的〈他〉」という項のためではなく、この「絶対的な隔たり」という〈関係〉のためにこそ〈同〉は「相対的ではなく絶対的」でなければならないのである。それ故に、まさにこうした〈関係〉から考え始めることで、「出発点に留まり続けること、関係の入り口に仕えること」が明かになる。つまり、これらのことが意味するのは、項どうしの関係への項の未参入性なのである。項が未参入であるにも関わらず、それによってこそ逆に支えられる〈関係〉は、項に先立っていなければ思考不可能である。無関係ですら関係の否定である以上、項の関係への参入を前提せざるを得ず、どんな関係も項の未参入性からは導出され得ないからだ。従って、項が関係に先立つ「存在論的關係」における諸項は、統一され全体として取りまとめられる可能性を有し

⁴ 藤岡 (2014) pp.144-145、小手川 (2015) pp.148-151。

⁵ 佐藤 (2000) は、こうした〈他〉の先行性を倫理の先行性によって論じる。〈倫理は学問の基盤である〉というレヴィナスの主張を検討し、倫理と存在論を峻別し階層化する。倫理の先行性は重要だが、佐藤はこの議論を、あくまである関係の他の関係に対する先行性として考えており、本稿で論じている項に対する関係の先行性とは異なる。第4章、第6章参照。

ている。これに対し、関係が項に先立つ〈関係〉において「分離された諸存在の間の関係は、諸存在を全体化することがない」(TI, 329)。これこそ「《関係なき〈関係〉 Rapport sans rapport》」(TI, 329)なのである。また、項の未参入を要請する〈関係〉を、項の方から把握するのは不可能である。それ故、「分離」においては「諸存在を包括したり主題化したりすることは誰にもできない」(TI, 329)。従って、「関係なき関係」に要請される諸項は、項からすれば自分が巻き込まれている〈関係〉の内実を捉えることはできないが故に、「絶対的〈同〉」は他の関係項を認識することもできない。項の関係への未参入性によって明らかにしたいのは、項における関係の不可知性である。

こうした項の未参入性が「ある項が関係の出発点として絶対的に留まり得る」とさらに強められて〈自我〉と換言されるのではないだろうか。要するに、「絶対的〈同〉」としてのレヴィナスの〈自我〉は、「絶対的〈他〉」と関係を構築する項ではない。「絶対的〈同〉」と「絶対的〈他〉」は対概念に見えるが、相関的な対立関係にはない。「関係の出発点として絶対的に留まり得る」〈同〉の絶対性は、項に先行する「関係なき関係」による〈関係〉への未参入性によって基礎付けられているのである。

このことから、「〈他〉の根源的異質性」を可能にする「出発点に留まり続けること、関係の入り口に仕えること、相対的ではなく絶対的〈同〉であることを本質とする項との関係によって〈他〉が異なっている場合のみ」という条件は、〈同〉の絶対性ではなく、「絶対的〈同〉」であることを本質とする項との関係⁶（強調論者）に存することが明らかになった。この引用箇所も含意されているのは、「分離」という「関係なき関係」の強調と、関係の先行性という逆転の強調なのである。次節では、この「関係なき関係」の考察を「形而上学」をキーワードにして深めていく。

I-2. 「分離」という関係なき関係 一形而上学的関係

前節では、項の相関に依拠しない「絶対的な隔たり」を維持する「関係なき関係」という〈関係〉から導出される項たる〈同〉が、〈関係〉への未参入によって絶対性を得ることが明らかになった。本節では、「関係なき関係」がどのような〈関係〉であるのか確認していく。

項の〈関係〉への未参入性は、この〈関係〉にある別の諸項の不明性を示している。すなわち「出発点に留まり続けること、関係の入り口に仕えること、相対的ではなく絶対的〈同〉であることを本質とする」項には、「絶対的〈他〉」が何であるのか認識できない。これが、「分離は、絶対的でありながら関係のうちにある諸項の間 entre termes absolus et cependant en relation に掘削される」(TI, 242)と言われる「分離」である。「絶対的でありながら関係のうちにある」ので、「分離」が関係そのものの消滅でないことは明らかである。では、この「絶対的でありながら関係のうちに

⁶ 後述するが、「顔は、理解され得ないもの、すなわち包括されることが不可能なもの」(TI, 211)と言われるのは、このためである。

ある」とはいかなる事態なのか。「存在論的關係」からは思考不可能なこうした〈關係〉を、レヴィナスは「〈同〉と〈他〉の關係—あるいは形而上学的關係」(TI, 29)と述べる。

超越は、私の実在と無限に隔たった実在との關係を指し示す。この關係は、關係である限り隔たりによって破壊されることはなく、この關係が隔たりを破壊することもない。こうした破壊は、〈同〉の内部的な關係によっては引き起こされるかもしれない。この關係は、〈他〉に入植されることがなく、〈他〉と併合されることもない。また、この關係は、〈同〉の同一性 l'identité そのものも、〈同〉の自同性 l'ipséité も侵害することなく、弁明を沈黙させることもなく、背教や脱自となることもない。

我々は、こうした關係を形而上学的關係と呼んでいたのであった。(TI, 32)

「形而上学的關係」が〈同〉と〈他〉という項から導出された「存在論的關係」ではないということは、この引用箇所からも分かる。「隔たりを破壊しない」關係が、「〈同〉の内部的な關係」となってしまった場合には、破壊される可能性があるということも、この關係が「〈他〉に入植されることはない」ということも、項に依拠しない〈關係〉の先行性を明らかにしている。従って、この「關係」は、「脱自」して〈他〉との距離をゼロにする癒合關係とは異なる故に、「〈同〉の同一性 l'identité そのものも、〈同〉の自同性 l'ipséité も侵害する」ことがない。このように諸項が諸項のまま保持される「私の実在と無限に隔たった実在との關係」が、「超越」と言われる。このために、レヴィナスにおける「超越」は「關係」ではあるが、どれほど隔たっているのか、あるいはどのように隔たっているのかという諸項間の存在論的関数からは算出されない。これが「無限に隔たった」ということ、すなわち〈同〉と〈他〉は「絶対的でありながら關係のうちにある」(TI, 242)という「形而上学的關係」が指し示す事態なのである。

形而上学的非対称性

こうして、「形而上学的關係」から導出された諸項、つまり「絶対的でありながら關係のうちにある」〈同〉と〈他〉が、「形而上学的非対称性」(TI, 46)として論じられるに至る。というのも、「絶対的でありながら關係のうちにある」〈同〉と〈他〉は、対称的である必要がないからである。〈關係〉が先行する「形而上学的關係」における諸項には、それ故に關係が結べないという事態は生じ得ない。従って、諸項が対称性を有している必要はないのである。「絶対的でありながら關係のうちにある」事態、それが要請する諸項の絶対性は、相対性の否定にとどまらず、諸項の対称性すら

⁷ 「顔は關係の中で絶対的に留まる」(TI, 213)と言われるのも、従って關係の先行性から論じられなければならないだろう。

も超えるのである。

従って、「形而上学的関係は、厳密に言って、表象 *représentation* ではありえない」(TI, 27)。この事態は、諸項の「形而上学的非対称性」に由来する。こうした「形而上学的非対称性」における諸項には、自分の置かれた〈関係〉そのものしか明らかでない。関係の種類や内実、さらにはその他の関係項の様態、そのすべてが〈同〉に「表象」されることはない。従って、「私 *je* は類を欠いて存在する」(TI, 28) とは、〈他〉と〈同〉の異種性ではなく、両項の「形而上学的非対称性」を示す。要するに、「形而上学的非対称性」とは、いかにバラバラかということである。こうして、「〈他〉の根源的異質性」(TI, 25) は、「形而上学的非対称性」として「分離」された〈同〉、つまり「絶対的〈同〉」との「形而上学的関係」において可能となる。「絶対的〈同〉」からしてみれば、何らかの関係の中にあることだけは分かり、この関係を通してそれに伴う関係項があることだけは分かるが、それが何なのかは分からないのである。

形而上学的運動 一欲望

さらに、レヴィナスが「形而上学」という用語を使用する際には、強い含みがあることにも注意しなければならない。形を持たないが故に経験によっては捉えられないものを考察するという一般的な形而上学に留まらない。「見えないものへの狂おしい要求 *folle prétention à l'invisible*」(TI, 23) という「形而上学的欲望 *désir métaphysique*」(TI, 22)、これが彼にとっての「形而上学」である。「形而上学的運動は、超越的である。さらに、欲望としての、不一致としての超越は、必然的に上向きの超越 *transcendance* である」(TI, 24) と言われるように、レヴィナスは「形而上学」を「運動」と捉えている。こうした「形而上学的運動」によって描かれる〈同〉は、非対称な〈他〉に「欲望」を抱くが、その非対称性故に〈他〉を手に入れることは不可能である。従って、「本質的に、〈同〉は多様性の中の同一化、歴史あるいは体系である」(TI, 30) と言われる〈同〉の「同一化」は、〈他〉の非対称性によって挫折させられる。にもかかわらず、否それ故にこそ賦活される「欲望としての、不一致としての超越」によって「形而上学的運動」が止むことはない。従って、〈同〉は成就することのない「同一化」を打ち切ることができない。このように運動として残り続ける「形而上学的運動」が、「同一化という本源的な働き」(TI, 25) なのである。ここから、自我の「卓越した同一性」が不動の一点としてではなく、動的なものとして論じられていることが分かる。

⁸ 少なくとも、「顔」が現前すると論じられる『全体性と無限』においては、「他の項がある」と考えられている。しかし、諸項の非対称性を突き詰めれば、「他の項がある」とは言い切れなくなる。とはいえ、「他の項がない」とも言えない。後期思想における「痕跡」は、非対称性のアポリアを解消するために準備されたと考えられる。

⁹ 「〈欲望〉とは、絶対的〈他〉への欲望である。充足される飢え、癒される渇き、鎮められる官能の外部で、そうした充足を超えて、形而上学は〈他〉を欲望する」(TI, 23) とあるように、〈欲望〉は成就されることがないために、終わることがないどころか、欲望を抱く対象によって賦活され続ける。

ここまで、項に先立つ関係の先行性を論じてきた。「形而上学的関係」によって割り出される項としての「絶対的〈同〉」は、この関係の先行性故に「形而上学的非対称性」でしかない〈他〉へと自発的に関係していくことができない。従って、〈同〉の絶対性は、〈他〉の絶対性とは非対称なのである。にもかかわらず、「形而上学的運動」である「欲望としての、不一致としての超越」によって〈同〉は、非対称であるが故に包含しえない〈他〉に対する「同一化」を、すなわち成就されない無益な「同一化」を行い続けている。この〈他〉には到達しない運動こそが、「出発点に留まり続けること、関係の入り口に仕えること、相対的ではなく絶対的〈同〉であることを本質とする」(TI, 25)ということを示している。それならば、「絶対的〈同〉」の絶対性は、「同一化」という働きによって端的に基礎付けられ得ることになるだろう。そこで、次章では〈他〉との相関に依存せずに絶対化する「分離を保証する内部性」(TI, 158)、すなわち「わが家」を、「同一化」という働きの下に明らかにする。

II. わが家の両義性

I 章では、まず項に先立つ関係の先行性を確認した。先行する〈関係〉の関係性を、「絶対的な隔たり」を維持する「分離」という「関係なき関係」によって明らかにした。〈関係〉に基づけられた諸項は〈関係〉から逃れることはできない。〈関係〉が続く限り項も続き、項が消滅したとしても〈関係〉は残り続けるからである。このようにして、関係の先行性は諸項の「形而上学的非対称性」を生じさせる。そして、この非対称性故に、〈同〉は他の諸項を指定することができず、その「不可視性 l'invisibilité」(TI, 22)のもとに「欲望」するしか道はない。これが、成就しないにも関わらず「同一化」し続けるしかない〈同〉である。このように、前章では「分離」という〈関係〉によって非対称に隔てられた〈同〉と〈他〉を論じた。続く本章では、非対称に隔てられた〈同〉の「分離を保証する内部性」(TI, 158)を論じる。

非対称な〈他〉に依存することなく項として成立する「絶対的〈同〉」の「内部性」もまた、「分離」という〈関係〉から導出される。従って、「エゴイズム、享受、感受性、内部性の次元全て—これらは分離の分節 articulation である—は、〈無限〉の観念にとって必要不可欠である」(TI, 158)と述べられる。こうした様々な〈同〉の「内部性」の議論もまた、〈同〉と〈他〉の関係によって要請される。「〈無限〉の観念」もまた〈関係〉なのである。従って、こうした関係の先行性は「内部性」を完全に自閉させない。これが「分離された存在において、外部への扉は開かれていると同時に閉じられていなければならない」(TI, 159)という「分離された存在」の「両義性」(TI, 159)である。この「両義性」は、閉じられた「わが家」(II-1)と開かれた「わが家」(II-2)とし

¹⁰ こうした「両義性」の議論は、身体との関係において論じられてきた。例えば、中(2008)は、主体の両義性を意識と身体でもって論じる。また、伊原木(2010)は「依存による独立」を身体そのものにおいて論じている(pp. 57-68)。

てそれぞれ考察される。

II-1. 閉じられたわが家 ―始原的なものに浸ること

項の関係への未参入を必要とする「分離」は、「絶対に閉ざされた存在を生み出す」(TI, 158)。これが主体の実存様態として「わが家」と呼ばれる。ここに「享受jouissance」というレヴィナス独自の生命維持活動に関わるのだが、「わが家」で「享受」が行われると論じてはならない。なぜなら、「わが家」こそが「…によって生きること」そのもの、すなわち「享受」という〈関係〉だからである。とはいえ、この〈関係〉もまた、「存在論的關係」とは言えない。この〈関係〉、つまり「始原的なものとのふさわしい関係は、己を浸すse baignerという事態にはかならない」(TI, 139)と言われる。「わが家にある」ことが、《始原に浸る baigner dans l'élément》(TI, 139)という〈関係〉そのものであることを示すために、以下の引用箇所を考察していこう。

分離は、単なる切断によって生じた空間的な疎隔ではない。分離されているとは、わが家にあるということだ。ただし、わが家にある…とは、…によって生きることであり、始原的なもの享受することである。Mais être chez soi …, c'est vivre de …, jouir de l'élémentaire. (TI, 157)

引用箇所の「わが家にある… être chez soi …」という奇妙な記述における「…」は、「…によって生きる vivre de …」の「…」に対応するので、そこには「始原的なもの l'élémentaire」があてはまる。この「享受」に提供される「始原的なもの」を、レヴィナスは「所有不可能なもの non-possédable」(TI, 138) とし、それ故「思考によって、対象として固定されることはない」(TI, 139)と言う。もし、この「享受」が項と項との対称的關係に依拠する「存在論的關係」であったなら、「始原的なもの」は対立項として対象化されなければならないはずである。しかし、レヴィナスは「…によって生きる vivre de …」の「vivre」を自動詞的に用いている。加えて、「始原的なもの」を「対象として固定されることはない」と言い、それ故に「…によって生きる」ことが《生の手段 moyen de vie》(TI, 112) や《生の目的 un but de la vie》(TI, 112) として論じられることを否定する。こうして、「存在論的關係」は退けられ、「始原的なものとのふさわしい関係は、己を浸す se baigner という事態にはかならない」(TI, 139)と言われるに至る。従って、《始原に浸る》

¹¹ 「一切の關係と所有は所有不可能なものただなかにある。所有不可能なものは、包含し内包するが、内包され包含されることはあり得ない。この所有不可能なものを、われわれは始原的なものと呼ぶ」(TI, 138)。

¹² 「われわれは、《おいしいスープ》、大気、光、風景、労働、観念、睡眠、などによって生きている。このことは、表象の対象ではない。われわれはそこで生きている。我々がそれによって生きているものは、ペンがペンによって書かれる文字にとって手段であるように《生の手段》であるのではない。コミュニケーションが文字の目的であるように、生の目的なのでもない。それによってわれわれが生きている様々なものは、用具ではなく、ハイデガー的な意味での道具ですらない」(TI, 112)。

(TI, 139) という〈関係〉は、「始原éléments」に対する「最初の同意un agrément premier」なのである。ここに項と項との対立関係はない。

とはいえ、これでは「絶対的に閉ざされた存在」とは言えないのではないか。この「絶対的に閉ざされた」という事態が完全なる自閉を意味するのなら、「始原的なもの」と距離を取らない《始原に浸る》という関係性は、確かに「絶対的に閉ざされた」とは言えないかもしれない。しかし、レヴィナスは「最初の同意—生きること vivre—が、自我を疎外することなく維持し、わが家chez-soiを形づくる」(TI, 152) と述べる。つまり、「わが家」において「絶対的に閉ざされた存在」が生きていて、そのうちにある「自我」が「始原的なもの」と「最初の同意」を結ぶのではない。「最初の同意」は、こうした「存在論的關係」ではなく、「生きること」(すなわち「享受」)が、「自我」を維持する「わが家」に先立って、「わが家chez-soiを形づくる」、「形而上学的関係」なのである。従って、「最初の同意」を拒否し、「わが家」を形づくらないという選択肢そのものが、「自我」には初めからない。なぜなら、「享受」が「自我」に先立つからである。とはいえ、「自我」は《始原に浸る》、つまり「…によつて生きること vivre de …、享受」(TI, 163) において溶解してしまうのではない。まさに「享受において、ようやく自我は結晶化される le moi se cristallise seulement.」(TI, 154) のである。こうした〈関係〉によって「結晶化される」からこそ「自我」を維持する「わが家」は「閉ざした存在」ではなく「絶対的に閉ざされた存在」と言える。

このようにして「始原的なもの」から生み出された「自我」の「自存性」は、「始原的なもの」との対立から勝ち取られたのではないことが明らかになった。「…によって生きることは、自存性そのものを、享受と幸福の自存性を描く。これが一切の自存性の本源的素描である」(TI, 113) と言われるように、《始原に浸る》という〈関係〉のもとで「結晶化された」という事態が「自我」の「自存性」なのである。つまり、「…によって生きる」という〈関係〉が「自存性」に先行している。従って、項と項の対立でない《始原に浸る》という〈関係〉である「享受」によって生み出される「自我」は常に充たされて「幸福」なのである。「享受」において行われる「同一化」は、《始原に浸る》という形で成就されると言えるだろう。しかし、この「幸福」が〈関係〉の先行性故に、「幸運chance」へと転じてしまう。

ここでもう一度「わが家にある… être chez soi…」、「…によって生きる vivre de …」という表記に戻ろう。この「…」には「始原的なもの」が入るとは前述した。それならば、例えば「始原的なものによって生きる」と明記してもよさそうだが、レヴィナスは『全体性と無限』において「享受」を、「…によって生きる vivre de …」と一貫して記述し、「…」を言葉で埋めない。ここにはどのような意図があるのか。この意図を探る手がかりは、「享受」の確かな「幸福」が、一方で「運のいいめぐりあわせ、幸運」(TI, 153) とも言われることにある。この背景にあるのは、「享受の幸福」を養う「始原的なものそのものの得体の知れなさ l'inconnu de l'élément même」(TI, 153) である。「始原的なもの」は自我に先立つため、自我には「始原的なもの」の全貌が明らかにされ

ることではない。I章で述べた「形而上学的関係」における項に、この〈関係〉の内実が明かにならないのと同様である。項は、先行する〈関係〉から生み出されるが故に、〈関係〉を表象することができない。項はただ「感受性sensibilité」として、先行する〈関係〉を感受するのみである。「感受性」は、「表象の契機ではなく、享受という事態」(TI, 144)であるため、「思考の秩序には属していない」(TI, 143)。従って、項たる「わが家」が、〈関係〉である「始原的なもの」の「享受」によって項の「内部化」を、自ら完成させることはできない。「始原はイリヤl'il y aへと繰り延べられる。内部化としての享受が遭遇するのは、大地の異邦性に他ならない」(TI, 151)のである。「内部化」は完成されるのではなく、その最深部で「大地の異邦性」に遭遇する。この「異邦性」が「始原的なものそのものの得体の知れなさ」なのである。従って、「わが家にある… être chez soi…」、「…によって生きる vivre de …」の「…」には、「始原的なもの」の「得体の知れなさ」、あるいは「異邦性」が描き出されているのである。成功して安定していたはずの「同一化」は、再び不安定な運動へと突き落とされる。次節では、この「異邦性」に着目することで、「分離された存在」が有する「両義性」の「開かれている」という事態を論じる。

II-2. 開かれた「わが家」—自己への内旋

前節では、「始原的なもの」との〈関係〉としての「享受」においても、関係の先行性が一貫して働いていることを確認した。従って、すでに出来上がった自我が外部と関わることを「享受」と呼ぶのではない。自我の絶対性は、「享受」において認められるのではなく、「享受」によって生じる「結晶化」に存する。本節では、この「結晶化」に重点を置き、「内部化としての享受」(TI, 151)の考察によって、「形而上学的関係」が自己との関係においても論じられていることを確認する。その結果として、自我の完遂されない「同一化」が自己に対しても働いていることを見ていく。「分離」の「両義性」における「開かれている」という事態に、自己に対する「形而上学的関係」を見出す。

レヴィナスは、「享受すること *jouir* の自足は、エゴイズムを際立たせ、エゴの自同性 *l'ipséité* と〈同〉の自同性とを際立たせる。享受は自己への後ずさり、内旋 *involution* である」(TI, 123)と言う。「享受することの自足」によって「〈同〉の自同性」が際立つということは、前述の「結晶化」、「内部化としての享受」に通じる。しかし、それがさらに「自己への後ずさり、内旋」とも呼ばれるのにはどのような意味があるのだろうか。自己を措定して自己同一化をはかる一般的な自我の理解に従うなら、この「〈同〉の自同性」は、静的に安定した「自己同一性」と言えるだろう。しかし、レヴィナスはそう言わず、自己に対する関係を「後ずさり、内旋」と動的に記述し、その完遂を明言しない。すなわち、閉じさせない。このことは、以下の引用箇所に明示されている。

実際、自我は享受の台座 *support* ではない。《志向的》構造は、享受にあつては全く別物である。

自我は、感受の収縮そのものであり、享受が描く巻き付きの極であり、内旋する螺旋の極である。曲線の焦点が、曲線の一部になっている。まさにこの《巻き付き enroulement》として、自己へと向かう運動として、享受は働く。(TI, 123)

ここでは、「始原的なもの」に対する自我の「享受」が「自己へと向かう運動として働く」と言われる。この「内部化」、「わが家」の地盤を確かめるために床下を掘り進むような「享受」にあって、「自我」は「自己」へと向かう「内旋する螺旋の極」と言われる。ただし、この「極」は「自己へと向かう運動」を引き起こすような始点でも、支点でもない。「自我」が、このような「存在論的關係」の項であったなら、自我は自己との関係を引き起こしたり、その関係を表象したりする『《志向的》構造」を有することになるだろう。しかし、レヴィナスは『《志向的》構造は、享受にあっては全く別物』と断っている。しかるに、「内旋する螺旋の極」である「自我」は、「内旋する螺旋」の中心に鎮座するような「台座」ではない。このことが指し示すのは、関係の先行性、すなわち「形而上学的関係」である。「内旋する螺旋」が「自我」に先立つ。さらに、この「自我は享受の台座ではない」とは、「享受」の完遂でも閉塞でもでない。

「自我は、感受の収縮そのもの」と言われ、これが「享受が描く巻き付きの極」、「内旋する螺旋の極」と換言されている。この通常なら安定した不動の一点のように論じられる「極」が、「感受の収縮そのもの」と動的に記述されるのは、この「極」つまり「自我」が終点ではないことを表す。「感受性とは、享受の仕方 *façon*」(TI, 143) とされる「感受性」が、「思考」や「表象」とは異なる「仕方」であることは前述した。このため、先行する〈関係〉の内実をつかめない「自我」は、ただ感受するのみであった。それが、ここではさらに「感受の収縮そのもの」とまで言われる。つまり、「自我」は「感受性」の受け皿（「台座」）ではなく、「自我」こそが「感受の収縮そのもの」という運動として論じられている。これが「曲線の焦点が、曲線の一部になっている」という事態である。こうした動的な「自我」には、終わることのない「形而上学的運動」がみとめられる。「形而上学的運動」、「欲望としての、不一致としての超越」(TI, 24)において、〈他〉には届かない〈同〉が論じられたのと同様に、ここでは「自己」に届かない「自我」が論じられていると言える。「自我」は「自己」を「同一化」できない。「自己へと向かう運動」が、あくまで《巻き付き enroulement》であることから、この自己同一化の不可能性が明らかになる。「自我」は運動そのものだからだ。とはいえ、〈自我〉は「自己と混じり合い、不意をつく《自己》を放棄してしまえない」(TI, 25)とあるように、「同一化」できないことによって〈関係〉までも放棄されるわけではないからである。「自我」は「運動」であって、「自己」そのものではない。「自我」は「自己」へと巻き付いてはいくが、この運動はあくまで《巻き付き》のままに留まるのである。

〈他〉を「欲望」する〈同〉とおなじく、「自我」は「自己へと向かう運動」でしかなく、それを自ら止めることができない。だからこそ、「享受することの自足」によって際立つ「〈同〉の自同性」

は、この「自ら止めることができない」ということによって担われるのである。このことに、「自我」の「卓越した同一性」(TI, 25)、すなわち「同一化という本源的な働き」(TI, 25)をみつめることができる。

Ⅲ. 同一化し続ける〈自我〉

これまで、「存在論的關係」(項が關係に先立つ)を回避し、「形而上学的關係」(關係が項に先立つ)を用いることで、『全体性と無限』におけるレヴィナスの思索を論じてきた。「存在論的關係」は項が構築する關係であるため、關係の分析は諸項の分析に依拠し、諸項は關係を保つために共通点や通底する地平を必要とする。そこで諸項は互いに包括され「全体性」を形成する。逆に言えば、「存在論的關係」においては、共通点のない諸項は無關係となり得るし、關係を構築しない独立した項も在り得るだろう。これに対し、「形而上学的關係」は項を生み出す〈關係〉であるため、〈同〉と〈他〉が關係を構築するための共通点は不必要である。〈關係〉によってすでに基づけられている諸項は、対称性を有する必要がないが故に、互いに制限し合うこともない。ただし〈關係〉から逃れることもできない。そこで諸項は、点在させられ、非対称に隔てられる。これが「〈無限〉の觀念—〈同〉と〈他〉との間の關係—は分離を無化しない」(TI, 54)」ということであり、そこに生み出された項における「エゴイズム、享受、感受性、内部性の次元全て—これらは分離の分節 articulationである—は、〈無限〉の觀念にとって必要不可欠である」(TI, 158)と言われる所以である。従って、絶対的な諸項が絶対的な關係を構築するのではなく、絶対的な關係から生じたことによって諸項は絶対的なのである。すなわち、「絶対的〈他〉」は、「絶対的〈同〉」から出発したのでは論じることができない。「絶対的〈同〉」と「絶対的〈他〉」との〈關係〉は、項と項との關係ではないからである。本稿が出发点とした問いに、こうして答えることができた。

とはいえ、〈關係〉から逃れられない以上、「絶対的〈同〉」は「絶対的〈他〉」を「欲望」し続けることになる。この成就されない「同一化」、すなわち「形而上学的運動」を続けるもの、これが「自我は、卓越した同一性であり、同一化identificationという本源的な働き œuvreなのである」(TI, 25)と言われる。一般的には不変性、安定性を有すると考えられる「同一性」を、レヴィナスは「同一化という本源的な働き」という動的で不安定な運動と同義に論じる。ここにレヴィナスの描く〈自我〉の「卓越した同一性」(強調論者)があるのである。「同一化という本源的な働き」としての〈自我〉は、その働きがどのようなものか、対象は何であるか、働き的手段や目的は何であるか、とい

¹³ 村上(2012)は、「壊れる可能性が主体の核にある」とし、〈同〉の分断を精神疾患に結びつける(pp.39-41)。しかし、運動の一部と化す「極」、端的な「働き」としての「同一性」は、壊れるような「核」ではない。自己を「同一化」できない自我の「同一性」は、そもそも自己同一性を有したことがない。このことからすれば、主体は初めから壊れているので、これ以上は壊れないと言えるだろう。むしろ、近代的自我が有する「核」たる自己同一性が壊れても、なお働き続ける「同一化」という壊れない「同一性」という視点こそが、「私であらざるをえない」主体にとっては重要であると思われる。

う「存在論的關係」の問題群の埒外にある。それ故に、〈自我〉の「同一化」がこうした問題に左右されることはない。従って、〈自我〉の「同一性」は「卓越」しているのである。

IV. 結びに —絶対的な冒険

最後に、問い残した問題を考察して、『全体性と無限』から後期思想への繋がりを示したい。主にⅠ章で考察した議論は、〈関係〉の先行性に重心を置いて諸項を論じたものである。では、諸項からすれば〈関係〉はどう論じられるだろう。これが、Ⅱ章で主に論じた「内部性」の問題系である。すると最後に、諸項どうしはいかにして関わり得るかという問題が残されることになる。ここに、後期思想へと続く道が開けている。

これまでの考察に従うなら、この最後の問題も、「存在論的關係」ではなく、「形而上学的關係」によって考察されねばならないだろう。とはいえ、「形而上学的關係」から生じた諸項は、それ故に〈関係〉への未参入性を有し、かつ非対称に点在している。従って、こうした項である〈同〉には、そもそも〈他〉の様態や位置がつかめない。従ってこの最後の問題は、〈同〉は〈関係〉へと参入することなく、所在不明な〈他〉へと関わることはできるのか、と問い直されなければならない。この「出発なき出発の可能性」とも言えるような矛盾した可能性、これをレヴィナスは「絶対的な冒険 *Aventure absolue*」(TI, 341) と言うのである。

善さ *La bonté* とは、赴くことである。照らし出すどのような思考—換言するなら、俯瞰する思考—も先行していないところへ、どこへ行くとも知らないところへと、善さは赴く。原初的な無謀さにおける絶対的な冒険、つまり善さは超越そのものである。超越とは、自我が超越することである。ひとり自我のみが、顔の命令に応えることができる。(TI, 341)

前述した最後の問題は、「ひとり自我のみが、顔の命令に応えることができる」というこの箇所をどう捉えるかということにも換言できる。「顔」に「応える」とはどういうことか、という問いを導きに考えよう。まず、「顔」は〈他〉の「本源的な表出 *l'expression*」(TI, 217) と言われ、この「表出」は「意味するもの *le signifiant*」(TI, 198) と言われる。さらに、この「意味するもの」は、「一

¹⁴ こうした諸項の点在性は、後期思想における「隔時性」の議論と地続きである。

¹⁵ この〈他〉の不確実性が「痕跡」へ深化される。従って、〈他〉が「痕跡」と論じられたことで、〈他〉と出会えなくなってしまうのではない。〈同〉と〈他〉は『全体性と無限』の時点ですでに出会っていない。

¹⁶ 「分離は、超越において確証される。実のところ、〈同〉が〈他〉へと通じることができるのは、全き安寧のうちでの休息においてではなく、真理の探究という様々な危険やリスクにおいてである」(TI, 54) とも言う。

¹⁷ 「他者の超越としての無限は、いかなる殺人よりも強く、その顔においてすでにわれわれに抵抗している。こうした無限が、他者の顔であり、本源的な表出 *l'expression* であり、『あなたは殺さないだろう』という最初の言葉なのである」(TI, 217)。

切の記号に先立って、自分自身によって現前されていなければならない。つまりは、顔を現前させていなければならない」(TI, 198)と述べられる。難解な箇所ではあるが、これまでの議論を下敷きにすれば整理することができる。

非対称に点在する諸項が、〈関係〉に入ることなく関わるためには、自らを「外へ押し出す expression」(「表出 expression」)しかない。ただしそれが「押し出し」である限り、伝達にはならない。その意味内容が相手に伝わる保証がないからである。従って、「表出」は「一切の記号」に先立つ「意味するもの」という作用そのものなのである。「記号」があるから、それを「意味するもの」が生じるのではない。こうした逆説は、本稿で何度も確認してきた。この逆説ゆえに「顔は、理解され得ないもの、すなわち包括されることが不可能なもの」(TI, 211)なのである。従って、〈同〉と〈他〉の関わりは意味をやり取りするコミュニケーションは異なり、意味されるものを欠く「意味するもの le signifiant」という「働き」のみに依る。「応える」ということも「働き」に過ぎない。

こうした「表出」は、「同一化」と同様に考えられる。従って、〈他〉の「不可視性」故に〈他〉を「欲望」する〈同〉、「始原的なもの」の「異邦性」を前にしても、つまり何を「同一化」しているのか分からなくても、「同一化」という働きが止むことのない〈同〉が〈他〉へ「表出」すること、それは「どこへ行くと知らないところへ」の「絶対的な冒険」となるのである。この「絶対的な冒険」はあらゆる俯瞰的思想に先行するが故に、「存在論的關係」にある自我には不可能である。従って、「形而上学関係」によって生じた「絶対的〈同〉」、すなわち「同一化」し続ける「自我」にのみ「超越」も「善さ」も拓かれるのである。

この「絶対的な冒険」における「表出」は、「〈同〉と〈他〉の関係—あるいは形而上学的関係—は本源的に語り discours として己を賭ける se joue originellement comme discours。そこにおいて、《私 je》—唯一的で特別な、そして土着的な存在者—の自同性に凝縮される〈同〉が、自己から出ていくのである」(TI, 29)という論述の説明にもなっている。そしてこの論述こそが、後期思想における「内存在性からの超脱 desinterressement」、「身代わり substitution」、あるいは「語ること le Dire」の議論にもつながる。『全体性と無限』において展開された〈自我〉は、後期思想と一貫性を有していると言える。

【文献表】

Emmanuel Lévinas からの引用は、下記のテキストから行った。引用に際しては、邦訳を参照しつつ拙訳を提示した。略記号とともに記す。

- TI : *Totalité et infini _Essai sur l'extériorité*, Martinus Nijhoff, 1961 ; Livre de poche, 1971.
 - ・『全体性と無限』(熊野純彦訳) 岩波書店、2005年
 - ・『全体性と無限 —外部性についての試論—』(合田正人訳) 国分社、1998年
- AE : *Autrement qu'être ou Au-delà de l'essence* ; Martinus Nijhoff, 1974

・『彼方へ』（合田正人訳）講談社学術文庫、1999年

【参考文献】

- ・ 藤岡（2014）：藤岡俊博『レヴィナスと「場所」の倫理』、東京大学出版
- ・ 小手川（2015）：小手川正二郎『甦るレヴィナス 『全体性と無限』読解』、水声社
- ・ 中（2008）：中真生「レヴィナスにおける主体の両義性（ambiguïté）について——『全体性と無限』を中心に」、『現象学念報』、24号
- （2005）：中真生「レヴィナスにおける「無限の観念」と「内在の超越」」、『論集』、24号
- ・ 佐藤（2000）：佐藤義之『レヴィナスの倫理 —「顔」と形而上学のはざままで』勁草書房
- ・ 村上（2012）：村上靖彦『レヴィナス 壊れものとしての人間』、河出ブックス
- ・ 伊原木（2010）：伊原木大祐『犠牲の身体』、創文社
- ・ 関根（2007）：関根小織『レヴィナスと現れないものの現象学 —フッサール・ハイデガー・デリダと共に反して—』、晃洋書房
- ・ 屋良（2001）：屋良朝彦「初期レヴィナスにおける〈存在〉と主体の誕生」、『哲学年報』、48号
- ・ 合田正人編『顔とその彼方 レヴィナス『全体性と無限』のプリズム』、知泉書館、2014年
- ・ 斎藤慶典（2005）：『レヴィナス 無起源からの思考』、講談社
- ・ 熊野純彦（1999）：『レヴィナス入門』、ちくま新書